スポーツクラブ人国記（5）

水泳部

創部90周年記念祝賀会

創部90周年

我が水泳部の創部はちょうど一昨年、平成25年（２０１３年）に、日本水泳連盟設立よりも1年早く90周年を迎えた。ＯＢ会の名称は恒泳会だ。

最近でこそ部員の全国的な活躍はめざましく、オリンピック、日本学生選手権、ジャパンオープン出場と、本学には珍しく全日本級の選手を輩出しており、ＯＣＵＳＡからも表彰の常連になっているが、この90年の内の四十数年間というものはホームプールを持たない水泳部であった。あちこちの練習場探しや交渉にも時間をとられながらの活動であり、当然入部希望者も少なく、部員の思いは「いつか借り賃も時間も気にせずたくさんの部員を集めて思いっきり練習してみたい！」の歴史でもあったといえよう。

そんな中を部員の士気を高め、団結し、幾多の存続危機を乗り越えて来られた大先輩方の水泳に対する熱い思いに敬意と感謝を表しながら【90周年】を祝ったのであった。

黎明期（明治・大正初期～）

日本は四面を海に囲まれた海国であり、また大阪は「水都大阪」だけあって、大川縁り、中之島剣先、桜ノ宮には古くから河童連でにぎわった。

明治37年（１９０４年）には前身である「市立大阪商業学校」の授業に既に【水泳科心得】が設けられて、水泳の鍛錬がなされていたと記述されている。かくして、遊泳はいよいよ盛んになったが、競泳としての水泳はまだ一般に普及されておらず、本学においても甚だ低調に推移していた。

日本最古の水泳定期戦の始まり

そこに、沈滞した関西水泳界に一顧の刺激剤を投ぜんがため、大正９年（１９２０年）には本学の水泳愛好者達の集団＝「有志団」と神戸高商水泳部とで【第一回大阪・神戸高商対抗競泳会】が茨木中学プールで挙行されたのである。正式に水泳部として校友会の一部に加えられたのは3年後大正12年（１９２３年）であったが、この対抗戦こそ戦後になってからも各新聞紙上に毎年紹介されたほどの【日本最古の水泳定期戦】の記念すべき原点であった。

大正12年が創部元年

第一回は神戸に惨敗したのだが、第2回の神戸戦も翌大正10年茨木中学プールで行われ、大高商有志団は22対20点で見事勝利を収め、プールいっぱいに凱歌を挙げた。ここでリレーの第2泳者が坂出海運社長から北四国運輸倉庫会長となった**植木楠夫**（大11年卒）である。植木はラグビー、野球、陸上各部の幹事もつとめるというスーパーマンぶりだったという。

第3回神戸戦は大阪毎日新聞社の後援をえて、同じ茨木中学プールで行われ僅差で2連勝。この勢いあって翌12年（１９２３年）晴れて独立の部として伊藤教授を部長に戴き出発することとなったのである。

部としての発進の年には第一回関西専門学校水上競技大会が市立築港プールで9月1日が初日であったが、後年**岡本喜一**（大14年卒）の話ではお昼頃になぜかプールの水面が左右に揺れたように感じたという、実はそれこそ関東大震災のそのものであったのだ。この年は以後の大会は中止、神戸戦も中止となった。岡本喜一は朝日麦酒に入社、一貫して営業畑を歩き大阪支店長から吹田市の大阪朝日運送取締役に。

昭和23年第16回三商大戦

後輩の面倒見よく、プールができた昭和40年代頃まで**恒泳会**の現役、ＯＢの年一回の総会では梅新角の、地下の朝日ビアホールで大サービスをして頂いたものである。ここは余談だが現在、大阪で最古の歴史を誇る大ビアホールだそうである。翌年の14年卒には**中西弘**（オリオン魔法瓶工業㈱社長）がいる。

大正から昭和へ

そして、年号は大正から昭和に移り、**市村楢敏**（昭2年卒）は市内大正区で市村橋梁㈱を創業、社長に就任。その後、戦中、戦後の混乱期の水泳部存続の危機を乗り越えることのできた第一の恩人である。しばらく途絶えていた部活動に恒泳会会長を引き受け資金的にもバックアップ。その情熱は長年のプール建設運動にも向かい、市にも大学にも幾度となく陳情、交渉に率先して赴き、会長就任後十有余年、他の諸先輩の力と情熱を結集、ついに結実し、昭和41年8月には悲願の新プールが完成するのだが、その話は後述する。恒泳会会長のままで残念ながら昭和46年4月まだ68歳の若さで急逝されている。プールが完成して3年後三商大戦でやっと総合優勝を果たした感動の瞬間、大粒の涙を流して喜ばれていたのが印象的であった。

昭和8年卒には、**広野正澄**（大日本印刷㈱専務取締役関西支社長）**北村弘毅**（大阪八州いすずモータース社長）そして**黒山忠雄**がいる。彼は当時の日本水泳界の名門茨木中学（現茨木高校）で水泳部。背泳ぎで全国中学校水泳大会に出場したという兵である。大正15年4月の入学でその年12月も終わらんとする頃昭和となった。そして、その在学中の昭和3年大阪商科大学への昇格が認められ、翌年には三商大戦の第一回が大阪築港プールで実現。この年陸上部、水泳部、ラグビー部が先駆け、翌年から他の運動部も行うようになったという。後年彼は世界保健通信社・社長として、医学専門書を多数出版、国会図書館では一つのコーナーを占めるまでになっている。10年卒には大阪屋証券（現・岩井コスモ証券）の取締役となり投資信託部長、神戸支店長、総務部長を歴任した**村井賦**がいる。**花登紀一**（昭11年卒）は江崎グリコで東京工場長、製造部長、大阪工場長を経て33年取締役に、43年副社長に就任。おまけ商法、道頓堀に昭和10年戎橋に巨大ネオン広告（初代、高さ33mのネオン塔）登場と個性の強い創業者江崎利一の商法で躍進したが、そういったトップが走れるのも二番手が地味ではあるが厚い人望があったからではないかと推測する。

同じ11年卒業に**柏原明生**がいる。大阪市職員となった彼は、昭和30年代にはちょうど市大の学生課長として赴任。長年の悲願であるプール建設に至った大恩人だったとは当時建設運動にスクラムを組んだ恒泳会の諸先輩の異口同音に言うところである。その後昭和46年市村会長の急逝により、次の岩橋譲に引き継ぐまで会長を引き受けた。また**近松良男**（㈱そごう常務取締役営業統括室長）も同期である。この11年には本学卒ではないが、水泳界としてはどうしても記さなければならないのが、名古屋高商を経てこの年**東京商大**を卒業した**清川正二氏**である。昭和7年名古屋高商の時ロス五輪の100m背泳ぎで金メダル。2位、3位も日本。表彰台を日本が独占したという後にも先にもない水泳界の歴史に残る瞬間であった。他の種目も殆ど日本が独占。まさに**【水泳ニッポン】**の金字塔であった。9年には三商大戦に彼も東京商大から出場、当時の日本水泳のメッカ神宮プールで行われ、**能勢良介**（昭13年卒、白浜花壇社長）の話だと、彼が同じ背泳ぎでゴールした時には既に清川氏は上がってタオルで身体を拭いていたという。清川氏は兼松商店（現兼松）入社。常務、副社長等を経て、1976年兼松江商（現兼松）社長。日本人初のIOC副会長（1983年まで）。1999年没。

前田信夫（昭13年卒）は日本ステンレス常務取締役から顧問、その後日本ステンレス工財社長を経て会長に。翌14年卒は**福島正章**と**近藤悌治**がいる。この二人は卒業後も現役部員や恒泳会の活動に長期間面倒を見ていただいたという感謝の言葉が多い。特に近藤はプール建設交渉にも、後輩の就職等もサポートし、最近までカクシャクとしておられたが、惜しくも一昨年（平成25年）97歳で亡くなられた。**福島正章**は第一銀行大阪支店長兼大阪事務所長となり、43年取締役に推された。傍ら東京帽子社長を兼ねてきたがその後東京帽子の社長業に専念。戦国大名福島正則の12代目の直系子孫であるという。近藤悌治は旭化成証券課長、秘書課長を歴任後、関係会社の向陽不動産専務を経て社長となる。

その後輩の**進藤規一**（㈱ひさご印刷社長）は長年近藤と共に現役のサポートを続けプール建設の立役者ともなった。大阪水泳協会でもその情熱はいかんなく発揮され、1964年の東京五輪の水泳競技の後には、当時の大阪プール（扇町）で「アフターオリンピック」が行われたのだが、彼の流暢な英語による通告（アナウンス）が大プールに響いたものである。

昭和16年12月、太平洋戦争勃発

当然のこと、部活動どころではなくなる。**抱喜一**（東宝化学社長）は大商大を繰り上げ卒業し、海軍予備学生を志願して海軍に入隊。そんな中でも17年には前年中止になった関西インカレが開催され、大商大は一部で5位。2

部では京大が優勝。当時の記録を見ると、**田中勲**（昭18年卒、NHK近畿本部庶務部長）など満足に練習もできない中で15年後の三商大戦でも通用する記録で優勝していることに驚かされる。しかし、戦況ますます厳しくなる中で18年秋には上級生はすべて出征してしまい、19年には後に恒泳会会長となる岩橋も出征、学徒動員で出征した**植村**、**向井**、**迪雄**、**森下**、**土井**の恒泳健児が還らざる人となった。勤労動員もあり、その活動の幕を一旦閉じ休部もやむなしとなった。19年卒業の**森脩**は戦後神戸新聞大阪支社長、取締役広告局長として活躍。

戦後の練習再開は学内の溜池＝これも米進駐軍が接収

太平洋戦争が終わり1年ほど経ったころ、すでに我が恒泳健児は不死鳥の如く活動を始めた。その中に後年恒泳会会長職を昭和49年から20年間引き受けた**岩橋襄**（昭22年卒）がいた。岩橋の記憶によれば、4月頃、ばらばらになっていた部員を12～13人集め水泳部は再発足、現在のプールのある南隣辺りの沼のような溜池で青藻と格闘しながらの練習。しかしここさえも杉本キャンパスが米進駐軍によって接収、埋め立てられてしまい、学舎も各地に分散、たこ足大学と言われながらまたプールを借り歩くジプシー生活が始まった。そんな中でも三商大戦を翌22年宝塚での復活第一戦にこぎつけたという。岩橋は建設、工事関係の東邦商会を経営、後年大臣表彰も受ける。水泳に対する情熱もあふれ、社員に水泳の有望選手を抱え、実業団水泳でも、マスターズ水泳の日本記録、世界記録を出した選手もおり、「東邦商会」の名は水泳の世界でも知られた存在になった。日本合成化学取締役の**後田寿**も同じ苦難の道を乗り越えた仲間である。

大阪市立大学（新制）の誕生

24年には学制改革により新制の大阪市立大学として発足、総長には「恒籐法哲学」と云われるほどの独自の法哲学を構築して有名な恒籐恭教授が就任。都島工専、女専の市立を統合、30年には同じく市立医科大を統合し、名実ともに日本屈指の公立大学として発足。たこ足大学を脱するべく杉本学舎返還運動等も熱を帯びた。それと共に水泳部も同好の士がいよいよ集まり、所帯も大きくなる希望が広がった。そんな中に若くして積水化学の人事部長、労務部長を務め将来を嘱望されながら急逝した**八木喜義**（昭25年卒）がおり、読売新聞運動部から編集委員を務めた**寺田好郎**（昭28年卒）がいる。そして、**石原巌**（昭28年卒、中山製鋼所）は4回生時全日本学生選手権に平泳ぎで標準記録突破し出場する。まだバタフライという泳法が出来たての頃で、平泳ぎの選手とバタフライの蛙足の選手とが同じ「平泳ぎ」種目で同居していた時代である。後年には日本初のスポーツ吹矢である日本安全吹矢協会「ヒューストン」を創設し、吹矢の楽しさとスポーツ吹矢を全国に普及した偉大な元祖といわれ、2002年には大阪府知事から【生涯現役スポーツ賞】を授与された。石原と一緒に全日本学生選手権標準記録突破したのが**駒村秀雄**（商昭30年卒）である。彼はラジオ関東の副社長から62年社長に就任する。同期の**藤原広蔵**は日本純良薬品社長で大阪府鳥獣審議会委員に任じ、日本野鳥の会大阪支部も務めている。

医学部の統合により、卒業後活躍するOBが多い。なんといってもその筆頭が**曽和融生**（医昭34年卒）である。彼は和歌山県の水泳の名門伊都高校時代に五輪の候補選手で、医学部水泳部が本学水泳部と合同する最初のきっかけを作った功労者でもある。卒業後も後輩の面倒見は熱心で殆どの医学部部員は大変お世話になりました、と口を揃える。平成10年頃には恒泳会の下部組織の大阪市大医学部と看護学部からなる【医水会】の初代会長を引き受ける。研究面では日本で最初のPEGの研究会を立ち上げ、著作も多く歌手村田英雄の主治医でもあった。市大病院外科医長から病院長に就任。㈳大阪掖済会病院特別顧問から現在は大阪市立大学名誉教授。学校法人行岡保険衛生学園園長である。

そして、41年悲願のプール完成時にどうしても必要な水銀灯8基を全額寄贈したのは**西村善明**（工昭34年卒）である。彼は日本触媒化学を経て父が創業した電気設備・計装設備工事設計、施工等の尼崎電機㈱に入社、取締役工事部長等を経て平成元年に社長に就任、16年間社長を務めトータルエンジニアリングを強みとして着実に業容を拡大させ、現在会長。その後はこれまでお世話になった業界への恩返しにと、兵庫県電業協会会長を引受け、他にも尼崎鉄工団地協同組合理事長も就任したりと、地元尼崎の発展、貢献のための様々な活動に現在も熱心である。特に尼崎市の「21世紀の森構想」に賛同し尼崎鉄工団地のすきまに緑を植えていく「すきま緑化」への取り組みから、尼崎もミツバチの住む工場づくりへと「楽しみながら話題をつくり、街を活性化、イメージアップしていきたい」と新鮮な発想で注目を浴びている。鉄工団地でとれた蜂蜜は「尼

みつ」とネーミングして販売されている。**東野嘉直**（商昭36年卒）は、前出の岩橋会長と共に平成6年まで20年間恒泳会幹事長を務めた。彼は家業を継いだ典宝㈱から東野登記事務所を設立、もっぱら地域貢献の功が認められ、平成24年には特に保護司の功績で「瑞宝双光章」を叙勲。

水泳部出身で鳴り物入りで入部してきた中に**建部和弘**（経昭38年卒）がいる。彼は中学時代には全国ランキングで上位に入ったが、天王寺高校時代は水泳部には入らず、大学に入って再度水泳に魅力を感じて挑戦したという。卒業後は岡山大学に奉職、後日法文学部助教授から経済学部教授になり昭和56年から平成14年まで同大学の経済学部教授に就任する。

今城成文（家政昭39年卒）は、後輩OB達の生涯水泳を楽しむ「恒泳会マスターズ」を結成、全国のマスターズ水泳大会に出場。後述の二神にバトンタッチするまではOB達が卒業後も水泳を楽しむその先頭に立った。彼はダイケンホームを経て土木建築関係の建国興業㈱を創業。現在も地元マスターズで水泳を続けている。同期に**窪田倭**（医昭42年卒）がいる。43年には東京女子医大心臓外科に、47年米国ミネソタ州立大学に留学から帰国後、51年聖マリアンナ医科大に。平成10年には同医科大の一般外科学教授に就任、平成18年名誉教授。現在は天王洲りんかいクリニック院長。日本低温医学会会長、日本膵・膵島移植研究会会長、日本小腸移植研究会会長を務める。恒泳会では関東支部の支部長も務める。曽和融生の実弟の**曽和悦二**（医昭42年卒）も水泳部に入部。付属病院の第二内科から、後年大阪市立芦原病院院長を務める。

悲願40数年、松下幸之助理事長の市大後援会によりついに！（昭41年）

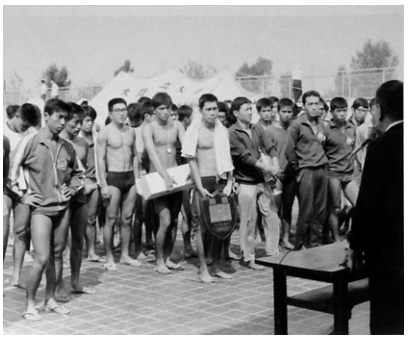
前出したように、柏原学生課長の就任のあたりから「頃は今！」と市村会長以下黒山、近藤、進藤らを筆頭に恒泳会幹部のプール建設への陳情、交渉は更に熱を帯びた。学内署名運動も現役部員が率先して運動。その結果ついに、発足したての【大阪市立大学後援会】（松下幸之助理事長）が第一期事業として取上げるに至れり！

松下理事長によるテープカット

昭40年秋の鍬入れ式には〝経営の神様〟松下幸之助氏も超多忙の中出席され、中馬大阪市長、渡瀬学長が揃って鍬入れ。そして、ついに翌年の昭和41年（1966年）8月、総工費3千400万円の真っ白なプールサイドに満々と水をたたえた50mプールに青空がまぶしく輝いた。鍬入れと同じように、松下、中馬、渡瀬各氏が市村恒泳会会長、名和統一水泳部長（経済学部教授）も列席、大勢の見守る中で松下氏がテープをカット。ここに水泳部の新しいページが開かれたのであった。

そして迎えた9月11日、第34回三商大戦が大会のこけら落しともなった。体育会応援団はスタンドで陣取りバトントワラーが花を添えた。新人福永の活躍もあり、3種目で優勝、結果は惜しくも競泳得点2位だったが、近年続いた最下位を脱出。800mリレーでは藤木、藤村、山本、福永組が新記録優勝し、400mメドレーリレーでも準優勝。ホームプール新築の成果が早くも表れ今後に期待を寄せた。この時の主将は**藤木太郎**（旧姓浦野）（商Ⅱ昭43年卒）で、主将を務める時に部の歴史の転換点に立てるとはこんな幸運なことはないと、その後の人生で水泳が大きく占めることになる。

次女の麻祐子さんはアトランタ五輪・シンクロの銅メダリスト。現役引退後は10年間スペイン代表コーチとして2度の五輪で初の銅から銀を獲得するまでに貢献。32歳の時『TIME』誌で「世界から尊敬される日本人100人」に掲載された国際派。現在は中国代表ヘッドコーチとしてリオ五輪の金メダルをねらう。又奥さんもシンクロチームの監督としてミュンヘン五輪に（正式種目前）。彼自身は長野県の水泳の名門県立須坂西高時代に国体に2回出場。17年前から『水夢王国』と名づけたホームページを開設。水中運動を通じた介護予防で国の医療費削減を説き、アクセス累計400万人を突破、これでテレビ、雑誌の常連となり、国会議員の介護予防、高齢化施策の研修には講師も務めた。米国系卸小売会社の取締役営業部長、人事部長を歴任し、現在東京都目黒区水泳連盟副会長。**二神　守**（商昭43年卒）はプール完成時の主務。恒泳会マスターズを前出の今城成文から引継いでメンバーの面倒な責任者を受け持っている。今年（平27年）には、リレー種目で280歳区分（平均年齢70歳）のチームを組めるのがまさに生涯水泳の醍醐味、みんなの楽しみである。彼は積水化成品工業の建材事業部・参事を最後に10年前定年退職。



昭和41年新装なったプールで
第34回三商大戦（市村会長の開会あいさつ）

藤村護生（経昭43年卒）は徳島県立城南高校水泳部時代高一、高二で国体に出場、プール完成後の二代目の主将を務めた。同年椿本チエイン入社。昭和59年仙台支社長を手始めに西部営業部長、精機事業部商品部長を歴任、同平成16年椿本スプロケット代表取締役就任。同19年椿本マシナリー社長を経て同24年退社。社長業の傍ら平成元年から始めて今年で27年間マスターズ水泳に出場しているのが自慢である。翌年は**古谷　生**（旧姓福永）（医昭46年卒）がいる。水泳の名門茨木高校卒で、高校水泳部では水球も経験していたので、当時水球の経験者は殆ど皆無の中、練習のリードをするようになった。競泳では当時唯一のポイントゲッターで、1回生時には全国国公立水泳に出場、800m自由形では大会記録にあと2秒に迫る好記録で優勝。西日本医学生大会でも一人気を吐いた。卒業後は岡山大学医学部麻酔科に奉職、助教授となり、麻酔科の新しい道を切り拓いたとNHKテレビにも紹介された。現在は倉敷で古谷クリニック院長。プロ野球の星野仙一とは幼友達が自慢。その同期には〝熱き男〟と誰もが言う**天願　勇**（医昭46年卒）がいて、特に沖縄では熱く理想を求めて走り続けている医師として知られている。十一歳の時母を乳癌で失った彼は「絶対ガンを退治する医者になってやる！」と決意。沖縄県具志川村（現具志川市）生まれの彼は、しかし沖縄がまだ本土復帰前だったため「留学生」として本土の大阪市立大学を選んだ。その志の通り彼は卒業後沖縄県立中部病院、東京の国立がんセンター、亀田総合病院等を経て、日本初の全床個室のハートライフ病院を地元沖縄に開設。その後大道中央第二病院院長を歴任。ガン専門医として3千例にも及ぶ手術の経験から辿りついた結論は、「緩和医療」ではなく「統合医療」だった。つまり、『予防』『介護』『医療』三つのサービスが一体になっていることが必要と、それを実現すべく、平成13年故郷沖縄の東シナ海の蒼い海、そして青い空が心を洗うような宜野湾市に「統合医療センタークリニックぎのわん」を開設。取材で訪れた九州大学大学院白畑教授は「ガン専門医として第一線で活躍されながら、患者さんの立場に目線をおき、大学病院などで手に負えなくなった患者さんも受入れ、往診もされながら真摯に医療に取り組んでおられるお姿には頭が下がる思いでした。」と書いている。現在も学会にもマスコミにも注目を浴びながら80名のスタッフと日々闘っている。しかし　天願の闘いはまだまだ終わらない。著書に『がんと生きる　家族ががんになったとき医師が選ぶがん治療』がある。

三商大4年連続完全優勝

プールが出来て4年目、まず三商大戦（競泳の部）ではいよいよ優勝。その時主将を務めたのが**橋本**二三**夫**（法昭45年卒）であった。その翌年からいよいよ競泳もポロ（水球）も優勝するという完全優勝が4年ほど続き、まさにホームプールを持った強みを俄然発揮することになる。16年ぶりの完全優勝を果たした主将が**西尾隆男**（法昭46年卒、住友生命）であり、**刀禰美喜男**（経昭47年卒、クラレ）、**吉本重雄**（法昭48年卒、橿原市役所）、**大西利行**（商昭49年卒、積水化学）と完全優勝は続くがこの世代に関しては次回の人国記に続くことにして、橋本に戻る。彼は卒業後日本ペイント入社、司法試験を目指して同年12月退社、昭和49年司法試験合格。昭和51年弁護士登録し、北大阪総合法律事務所を経て平成元年橋本法律事務所を開設して独立し平成26年まで開業。恒泳会では岩橋会長の後継として平成6年会長に就任、平成23年藤本現会長にバトンを渡すまで17年間会長を務めた。会則を確立するなど現在の恒泳会組織の足固めを合田幹事長と進めた。橋本会長とタッグを組んで幹事長を17年間務めたのが同じ法学部の**合田洋一**（法昭45年卒）である。昭和55年から平成26年まで土地家屋調査士業を営み大阪土地家屋調査士会（1200名）の常任理事としても活躍。一昨年には「部創立90年記念誌」の発行という記念すべき作業を自ら買って出て、資料の散逸する中、その困難な仕事を編集長としてやり遂げ見事刊行した。同年の**河原正明**（医昭47年卒）は、まず国立近畿中央病院に勤務。その後独立行政法人近畿中央胸部疾患センターとなり、同統合診療部長を務める。定年後は大手前病院副病院長。現在は診療部顧問として、多くの肺癌診療医はその他の呼吸器疾患を診てないのが現実であるが、彼は呼吸器全般を診療している。他に（社団）日本・多国間臨床試験機構（JMTO）の専

務理事。一方で、5年前から医水会会長を曽和から引継ぎ2代目会長として後輩の面倒をみている。その傍ら現在も恒泳会マスターズの一員として数々の大会に出場している。

異色の存在に**吉川弘哉**（法昭46年卒）がいる。京都府医師会に勤務後、古都京都は洛西の名刹、真言宗東寺派・正法寺住職を継いだ。重要文化財である木造千手観音立像（鎌倉時代初期の作）や、東山連峰を借景にした鳥獣の石庭も名高い。同じ法学部の同期は**堂場敬一**（旧姓津守）（法昭46年卒）である。積水化学に入社、後年積水テクノ商事東日本の社長を務めた。

今も水泳活動を続けている卒業生の一人に**藤本知**（工昭50年卒）がいる。彼はシャープ中央研究所の技術者として勤務しながら、日本マスターズ水泳の日本記録を数回樹立すると共に、世界マスターズ水泳や国体や全国ねんりんピック等の年齢別水泳競技に於いて往年のオリンピック選手達と競い合って見事入賞を果たしており、大学卒業後の運動活動に花を咲かせた一例であろう。定年退職した今は奈良県水泳連盟や地元の水泳連盟等の理事を務めながら、現在恒泳会の会長として水泳部とは切り離せない生活を続けている。

ソウル五輪競泳コーチに

具志　統（商昭52年卒）は水泳界の第一線で一貫して活躍しており日本の水泳界でも稀有の存在の国際派の指導者として名を知られている。米国でコーチ業を修業後、近年はスイミンググループ、イトマンで強化コーチとして日本代表を育てていたが、現在はシンガポールでコーチとして指導中。最新情報では、本年4月からは台湾の代表コーチとしてリオデジャネイロ五輪へ台湾の選手達を導く役割を負うことになった。　浪人中に始めたスイミングスクールのアルバイトがまさかこんな形で一生の仕事になるとは考えてもいませんでしたと本人は云うが、

・1987年パンパシフィック水泳・日本代表コーチ。
・1988年ソウル五輪の日本代表コーチ。
・2005年モントリオール世界選手権日本選手団の総務

と、輝かしい経歴。当時日本水泳連盟外国委員も務めた。奥さんも元全日本級の選手。子供4人もいずれも水泳選手の水泳一家である。

市大初のオリンピック選手小林寛美

平成年間の若い卒業生として特筆すべきは**小林寛美**（経平19年卒）である。彼女は2008年北京五輪のシンクロチームの日本代表選手で、大阪市大出身の唯一の**オリンピック選手**であろう。2005年世界選手権・2006年ワールドカップ・アジア大会・ローマオープン等のメダリストでもあり、個人としても2008年には日本選手権でソロでメダルを獲得している。世界でトップを争うというのは生易しい事ではなく、シンクロ競技力以外に、競泳・バレエ・ダンス・体操・トランポリン・芸術鑑賞・栄養管理……身体で表現するためのありとあらゆる努力と訓練を重ねた結果である。またそれらは其々超一流のレベルで、例えば競泳においては当時の大阪市大女子歴代最高記録を四種目に亘って確保し、一〇〇m自由形や二〇〇mバタフライに於いては今もその記録が破られていない。現在は結婚後もラスベガスにてショーのパフォーマーとして活躍中だが「自分の弱い所を見付けた時が次の飛躍への始まり……」と言う彼女の活躍は世界を舞台に今なお続いている。

Kobayashi 後列左端が小林寛美

最も若い卒業生としては**小梶幹太**（経平26年卒）がいる。バタフライの選手としては致命的な肩脱臼の故障に入学後は苦しんだが癒えると共にその実力を発揮して、大学四回生にてベストを出し続け、全国国公立では一〇〇mバタフライも二〇〇mバタフライも三位入賞を果たし、日本学生選手権ではB決勝のセンターコースを泳ぎ、厳しい標準記録を突破して競泳陣として初の**ワールドカップ**東京大会にも出場している。彼は昨春より関西電力に勤務しているが、学生時代に培った逆境に於いても努力を続けて栄冠を勝ち取った経験と持ち前の明るさと勇気で、現在苦悩している日本の電源インフラに光明を見つけ出してくれるものと期待している。

（藤木太郎・藤本知・記）

2013年関西インカレ
メドレーリレーで２位